

ふくろうのつばやき

——人生も一つのストーリー——

真壁 伍郎

妻の勤めている幼稚園では、かれこれ十五年近くも貸出文庫が続けています。子どもたちに絵本を楽しんでもらいたいためです。そして、お母さんたちには、ご苦労でも、かならず読み聞かせをしてくださいとお願ひし、その時の子どもの様子や、感じたことを、読書ノートに



しるしてもらっています。

わくわくする思いで、子どもが幼稚園から借りていった本が、家庭でどんなふうに乗りましたか。それが、この読書ノートには、お母さんたちの心こもる筆でつづられています。先生もかならず目を通し、筆を入れていきますので、親と教師でつづる、一人ひとりの子どもの成長の素晴らしい記録になっています。

ある日、ユカちゃんが借りていった本に、電話のことが出ていました。お母さんはユカちゃんと本を楽しんだあと、こういいました。

「ユカ、電話ないときどうだった」

この家には、少し前まで電話がなかったのです。するとユカちゃんの返事、

「電話がないときは、トン、トン、トン（家の階段をおりる音）、ボン、ボン（くつをはく音）、ボタン（ドアの音）、トコ、トコ、トコ（歩いて）、ジージー、もしもし、さよなら、ガチャン、トコ、トコ、トコ（歩いて）、ただいま、おわり。電話のあるときは、トン、ト

ン、トン（階段おりて）、もしもし、さよなら、ガチャン、トン、トン（階段のぼる）、電話あるといい気持ち」

お母さんは、ユカちゃんのこの詩のような言葉を読書ノートに書きとめ、こうつけ加えました。

「はじめから物がそろっていると便利さなど、気づかないでしょう。家には、車もありません。どこへ行くにも、まず歩き、出かけるにも、バスに乗ったり、汽車に乗ったり、なんとも不便な生活ですが、自然と荷物を持ってあげるとか、乗り物の中でのマナーとかが身につくようです。幼稚園までの距離も会話を楽しんだり、草笛、花などなど、自然とのふれあいも多く、あまり苦になりません。この一年も歩き通したいと思っています」

字が読めるのだから、あなたは一人で読みなさいとか、読んでやりさえすればいいのだろうと、自分の時間だけを惜しんでいる親には、このユカちゃん親子の楽しさは分からないかもしれません。それに、親自身も本当の意味で自分の生活を振り返ることはないだろうと思

ます。自分の時間を差し出すことによってしか得られないなにか大切なものが、親と子の交わりにはあるのです。

一冊の絵本を楽しみながら、親がどんなに自分の子どもをへ発見✓しているか。そして、自分を振り返っているか。お母さんたちがつづる「わが子の読書ノート」には、こうした驚きや発見が随所に見られます。自分から生まれた子だから、何もかも分かっているという思い込みが、どうしても母親にはあるのでしょうか。これが、本を読んでもらって、そのお話に感動している子どもの姿に接したりすると、自分とは違ういのちがたしかに育っているという実感になり、自分のありようにまでそれがはね返ってきます。さらに、書くという作業がその気づきをいっそう確かなものにさせてくれます。

そんなわけで、読書ノート一冊を書くことによって、子どもと絵本と親の「間をおいた三角関係」が確認されるようになります。子どもが育つだけでなく、親もそれなりに、しっかりしなくちゃと思うようになるのです。

う。この幼稚園では、いつの間にかお母さんたちの読書会が始められるようになりました。

本当に絵本は、子どもを育てるだけでなく、親も育ててくれました。

ところで、幼稚園の頃、本を楽しんだ子が、その後どんな読書をしているか。この幼稚園のお母さんたちが、卒園生にアンケート調査をしました。

卒園して間もない子たちはまだそれでも本を楽しんでいました。まだ、お母さんたちも、「読み聞かせが大切よ」という幼稚園の先生の言葉を頭にとどめているのです。問題は、小学校三、四年生の頃から始まります。読む子と読まない子がだんだんはつきりしてきます。もうお母さんも、ほとんど本を読んでやりません。学校の勉強がむずかしくなってくる頃ですから、それどころではないようです。

この調査で面白いことが分かりました。幼稚園や小学校の低学年の頃、一晩では読み切れないような、いくら

か長めのお話を読んでもらっている子の方が、後々まで、読書を楽しんでいるということです、

なるほどなと思いました。言ってみれば、おあずけの味を知っているほうが、楽しみを持續できる。長いお話を、今日はここまでよ、とっておしまいにする。それには、聞くほうも、読んでやるほうも、それなりの我慢が要ったことでしょう。でも、それがあからこそ、明日への期待をふくらますことができた、これからお話はどうなるのだろうかといういろいろ想像をめぐらしながら、眠りにつく。幸せとって、これ以上の幸せはないのかもしれません。

本を読む楽しみは、端的に言ってこれではないでしょうか。先を期待するから、忍耐できる。いや、忍耐などではなく、自分なりの夢と想像をかりたてることができる。それによって、今という時を楽しむことができる。

教育の普及のおかげで、これだけ文字が読める人が多くなったのに、なぜ、学校教育の段階を終えてしま

と、多くの人は本を読まなくなるのか。ブルーノ・ベッテルハイムという学者はそれに疑問をもちました。そして、いろいろ調査した結果、彼の結論はこうでした。

文字が読めるように教育しているのは、ドアの把手の扱い方を教えているようなもの。しかし、そのドアを開けて、向こうの部屋に入っていこうとするかどうかは、別な問題だということです。その部屋に面白いものがあると期待しなければ、興味を持たなければ、わたしたちは決して、ドアの把手に手を掛けて開けてみようとは思いません。

ドアの向こうに何があるのか、その興味を起こさせ、期待を呼び覚ましてくれるのは、誰かがそのことを語ってくれるからです。読み聞かせや語りは、その大切な役割を果たしてくれます。考えてみれば、大学の授業もこの読み聞かせや、語り以上のものではありません。教師の「語り」によって、学生たちは向こうにあるものへの思いや期待をかりたてられ、一生懸命に本のページをめくり、実験に精を出すこととなります。であればこそ、

その「語り」が「騙り」にならないよう、教師たちはいつもみずから戒めなければならぬのでしよう。

「人生も一つのストーリーだね」

ふくろうが、そうつぶやいています。はて、語りや本や読み書かせのことだけを考えてきましたが、ふくろうはどうも、わたしたちの人生も、一冊の本、一つの物語のようだと言おうとしているようです。

西ドイツ、カイザースヴェルトの母の家の図書室で、ふと見つけた詩のことが忘れられません。あなたがたは、平和を告げる鳩。絶望と悲惨のあるところにはどこへでも飛んでゆき、人々に救いをもたらし、希望を告げよ。こうして教育や看護の技能を身につけたディアコニッセ（プロテスタントの奉仕女）たちが、ここから世界中に送り出されて行きました。（その数名が日本にも来て、日本で最初の特別養護老人ホームをつくり、老人福祉法制定のきっかけとなってくれました。これを知って

いる人がどれほどいるでしょうか！）

このディアコニッセたちの働きが、その図書室には膨大な記録となって残っています。そのいくつかを手にして見ているうち、こんな詩を見つけました。

書いているのは、もう一〇〇年以上も昔の人、アグネス・カール。彼女は、ドイツのナイチンゲールと呼ばれたほどの人で、国際看護婦協会の設立期に、世界の看護婦たちのリーダーとなって働きました。その彼女の詩、

娘のころのある日 わたしは

ふるさとの草原の 川のほとりに座した

時がはてしなく 目のまえに広がってみえた

あこがれのかずかずを 思ううかべても

真にその時の広がりを 満たすものはなかった

そのとき ころろの奥底に 一つの子感が目覚めた

やがて わたしの人生を形づくるものはなにか

まだとらえがたい おぼろな構図ではあった

しかし わたしは 今の今まで
そのことを忘れたことがない

なにをして、どう生きようかと、彼女は考え、また迷ったことでしょう。そして、ふと与えられた予感に耳を傾け、彼女はやがて教師となり、さらに看護婦となつて働くことになりました。

そして、彼女の晩年の詩、

神はわたしを はたのまえに置かれた

さかんに働 き わたしはすでにこの齡に達した

わたしは今 あの青春の長い日々のことを

思い起こそうとしている

短くなつてきた この一日一日と そして 夜が

今までの働きを 寸断してしまわないように

かつて若い日に思い描いた構図が、織る布の表に現れているだろうか。わたしたち一人一人もみな、はたのま

えに置かれています。そして、自分の人生のはたを織りつづけている。さて、どんな模様がそこに織りなされていっているのでしょうか。やがて、わたしたちのこの働きも止まろうという時に。

子どもたちは、ある年頃になると、しきりにいろいろな人の伝記を読みたがるようになります。自分の人生のストーリーを思い描いてみたいのです。彼のストーリー (his story || history) を知って、自分のストーリー (my story) を作ろうとします。もちろん、彼のものがそのまま、自分のものとはなりません。ストーリーを考えながら、自分はどうかと考えます。

わたしの家には、何種類かの読書会がもたれています。その一つに、文庫に子どもをよこしておられるお母さんや、かつて文庫に来ていた子どもも参加できる集まりがあります。いつかそこで、いくらか古典的かなと思いながら、吉野源三郎の『君たちはどう生きるか』をテキストに取りあげました。その時は、大人たちになじま

て、高校生たちが何人か出席していました。

彼らのその本を読んでの感想はこうでした。

「題名だけ聞くと、なんとなく面倒な本だと思っただけで、読んだらとても面白かった」

どの高校生も、口をそろえて「よかった」の連発。いつもは、むずかしそうな議論をしたがる、わたしたち大人も、この日だけは、もっぱらその高校生たちの読後感に教えられていました。

ちょうどこの年頃の子どもたちの心にびったりの社会や人間の問題と、そこでの生き方が、ごまかしなく述べられているというのでした。

十五歳のコペル君、彼の心をそのまま叔父さんは受け入れ、その目の高さで社会や人間のあり方を一緒に読んで考えてくれている。それがとても嬉しいようです。哲学とやらをかみ砕いて教えてやろうという、学校の倫社の先生とは、ぜんぜん違うのだそうです。

「こんな先生や、大人がいてくれたらねえ」

高校生たちは、ためいきをついていました。

シャルロツテ・ビューラーという心理学者が、子ども心の発達段階は、子どもたちが好んで読む本にそれがあらわれているといったのは、もうずいぶん昔のことです。彼女のその研究に対しては、その後さまざまな意見があったようですが、子どもたちを見ると、大筋ではそのとおりではないかと思えます。

四歳くらいまでは、「もじゃもじゃベーターの時代」。子どもは身近な現実に向いている。そのあと八歳くらいまでは、「昔話の時代」。十三歳くらいまでは、「ロビンソン（クルソー）の時代」。さらにその後、十四、五歳までは、「英雄の時代」だといえます。子どもたちの興味と関心は、ほぼその本またはジャンルで示された世界に向いている。

子どもたちはいろいろなお話を楽しみながら、実は自分を主人公にした物語を思い描き、作り出そうとしています。現在の自分たちを未来に投げかけ、自分のドラマを夢見ている。

わたしたちはよく、筋書きのない人生を送っていると
います。しかし、実際はそうではなく、かつて思い描
いた筋書きが、そのとおりにならないことで悩み、
筋書きがないと知っているだけのこと。いつでも筋書き
を見つげようと努力しているし、また、そのために悩ん
でもいる。

ドイツのある心理治療家がこんなことをいっていま
す。悩みは、三つのことで生じる。一つは、群のなかに
いて、あまりにも人の強い影響下に置かれ、自分を生き
ていないとき。一つは、反対に、群から離れすぎ、ひと
り立たされたとき。もう一つは、人生の一局面しか見え
ず、その先が見えないとき。

面白いと思います。人との関係だけでなく、わたした
ちは自分のいのちが、どこへ、どう行こうとしているの
かが分からなくとも、不安を感じて悩むのです。川の流
れにたとえれば、目のまえの激流に、すっかりおじけづ
いてしまい、その先に広やかな流れがあることなど思い
うかべようともしません。

それだからなのでしょう。子どもたちに語られてきた
昔話は、そのほとんどが、幸せな結末で終るようになって
います。困難があっても、かならずその先は明るいと
物語ります。その意味で、昔話は楽天的ともいえます。
でもこれが、昔話を語り伝えた人々の現実を生きての実
感であり、子どもたちに伝えたい思いでもあったので
す。

物語は、生きるためだけではありません、死ぬために
もわたしたちは、物語を必要としています。そのストー
リーがあるからこそ、わたしたちは安じて死んで行ける
のだともいえます。あらゆる宗教が、そして哲学が、な
ぜ確かめることもできないような死後の世界のことを、
あれほど熱心に語り、説明しようとしているのか。

物語は、そしてそのストーリーは、わたし一人の生命
を越えた広がりとお興行をもったとき、それこそわたした
ちが心から安んじて、身を任せられる筋書きとなるよう
です。

テレビのドキュメント番組、「一日一生」——九十五歳の人間教育——で紹介された、現役の高校教師、榎本煤子（うめこ）さんという方がおられます。山形県の山奥の学校、キリスト教独立学園というおそらく日本一小さい高等学校で、書道を教えておられる方です。五年前、たまたまクリスマスの翌日に訪ねたわたしに、一枚の書を見せてくださいました。

「九十のクリスマスを迎えて、クリスマスの晩、ひとりこんなを書いてみました。わたしの所感です」
そこには、しっかりと、しかも流れるような筆でこうしたためられていました。

わが心は主をあがめ

わが霊は教主なる神を

よろこびまつる

その婢女のいやしきをも

顧み給えはばなり

そして、その色紙の裏には

千九百八十二年　クリスマス晩

九十　ばば書く

雪の降り積もる山のなか、静かにご自分の一生を思い返されたことでしょう。そしてそこでの思いは、自分のような者をも顧み、用いてくださったという、あのマリヤの讃歌そのものでした。二千年前の一女性のドラマが、今、ここで、それがそのまま現実となっている。

九十五歳になった煤子先生はよくこんな話をなさいます。

「わたしたちは、みんなでお芝居をしているのです。どの人にもそれぞれふさわしい役が与えられて。楽しいですね。わたしはこれをなんって呼ぼうかしらと考えたけど、やっぱり、天国座と呼ぶのが一番いい」

子どもの頃、よく歌舞伎座にお芝居を見に連れていってもらったそうです。演じる人と見る人。そして、その

両方が一つの劇場のなかに納まっている。それが今しきりに思い出されるのだそうです。

「わたしも最後までちゃんと自分の役を演じなければいけません。年だからって甘えているわけにはいきません」

「九十五にもなると怠け心がでてくるんです。いつもは六時前に起きるのが、六時をすぎても起きようとしなかったり、今日は寒いから掃除はちょっとにしておこうとか、洗濯は休もうとか、年に甘えたり、寒さに甘えたり、だめですね」

しかし駄目な自分を決していじめているわけではない。暖かく突き放して、ユーモアをもって受け止めておられる。

「客席にいるわたしが、舞台にあがっている榎本様子をみて、それがどんなお芝居をするかみています。楽しいですよ。みなさんもみんな、そのお芝居にでている」

舞台のうえで行き詰まることがあっても、天国座の総

監督がちゃんと見ておられる。そして、必要な助けはちゃんと与えてくださる。榎子先生の人生舞台論、いや世界舞台論は、果てしなく大きい。

苦勞の多い人生だったと聞きます。きつと行き詰まるたびに、帰り着くところに帰って、再出発されたのでしょうか。

人生もまた、一つのストーリー。問題は、その筋道が見えなくなったとき、わたしたちは、どこに、どう帰ればよいのか。

もみの木の匂い

ローソクのほめき

クリスマスうた

美しく包まれた プレゼント

ああ わたしは

どこか外へ 出て行かなければ

冷たい夜のなかへ

氷が かたくきしむ

待降節 そして クリスマス

わたしは それにあたいするのか

わたしのうちに

子どもが泣く

戸を叩いている

光へと 出たがっているのだ

きたりたまえ 主よ

みちびきたまえ 光へと

スイスのケティ・ホール夫人の詩です。

偽り、見せかけ、そのすべてが問われ、剥ぎ取られる
とき、わたしたちはただ、光を求めて泣き叫ぶ内なる子
どもに帰ります。でも、それこそが、新しい出発の地
点、古い物語が新しくよみがえって、わたしたちに生き

るストーリーを思い起こさせてくれる時です。

「いいかね、君のストーリーがなにかを、ときには思い
起こし、考えなさい。子どもたちが、君に問う一番のも
のは、それなのだから」

ふくろうは、とどめをさすように、わたしにはっきり
そう語りかけました。

(新潟大学医療短期大学部)